

## 南京ドキュメンタリー映画祭 700名の盛況

—「12月13日虐殺」記念77周年を前に—

11月28日、「エルおおさか」で、日本初の南京ドキュメンタリー映画祭が10時から16時30分にかけて行われ、のべ700人が鑑賞しました。『南京引き裂かれた記憶』につづいて96歳の「元海軍兵士の三谷翔さん」が証言に立ち、実際に見た累々たる犠牲者の模様、さらに見聞したことを絶対口外してはならないと命令されたことを生々しく伝え、勇気ある証言に会場から大きな拍手がわきました。



96岁高龄的原日本侵华海軍士兵三谷翔(左一)在“南京大屠殺77周年紀念片电影节”現場向日本民众讲述南京大屠殺真相。  
本报记者 刘翠国摄

続く、最新作松岡環監督『太平門消えた1300人』、アメリカ人監督による『NANKING（南京）』も含め、250人近くが全編を通して鑑賞しました。『太平門消えた1300人』は、松岡さんらが中国側生存者300人以上（南京訪問80数回）、日本側の元兵士250人以上を取材することによって得た証言を中心に構成された貴重な映像で、国際的にも高い評価を受けています。

会場内では被害者の語る言葉にすすり泣く声も聞こえました。最終の上映も会場は立ち見の盛況。実行委員会の中心となった「銘心会南京」の若者男女二人が司会を務め、比較的若い観客が多かったのが印象的でした。

今年、ユネスコが「南京大虐殺文書」を世界記憶遺産に登録するという大きな前進がありましたが、日本政府は臆面もなくこれに抗議するとともに、ユネスコへの出資を再検討するとか審査委員会に参加させろ、といった脅迫的発言を繰り返し、世界の輿論をかっけています。こうしたなかで、大阪で「南京事件ドキュメンタリー映画祭」が府市民の支持を得て成功したことは、日中友好の大きな前進を示すものです。（参照：『日中友好新聞』2105年12月5日「南京大虐殺から50年」）。

日中大阪府連も上映実行委員会に参加し、当日も常任理事始め多数が鑑賞に駆けつけるとともに、上映機材操作のサポートをしました。リレートークでは山本恒人副会長が「日中不再戦7.1 集会と長谷川テル女史佳木斯陵墓日中合作式典」の模様を伝え、「大阪で日中友好の輪をさらに広げましょう」と発言、参会者の注目を集めました。『人民日報』も、「日本民間団体拳辦南京大屠殺記録片電影祭」の見出しで大きく取り上げています。

【写真は『人民日報』11月30日掲載、南京大虐殺を証言する元海軍兵士三谷翔さん。】